CHUSUGI ✖ BUNGAKUBU

スチューデント・ライブラリアン
活動報告
vol.5 - 2018年度

2018 年度

スチューデント・ライブラリアン活動報告

目　次

・何のために本を読みますか

文学部長　　宇佐美 毅　…　1

・図書室の主

文学部長補佐　　山科　満　…　2

・発信型図書館の可能性

—2018 年度のスチューデント・ライブラリアン活動について—

中央大学杉並高等学校教諭　大山　裕隆　…　3

・スチューデント・ライブラリアン 5 期生活動記録　…　5

・スチューデント・ライブラリアン活動報告

文学部 人文社会学科　社会情報学専攻 2 年　北　夏苗　…　6

文学部 人文社会学科　社会情報学専攻 2 年　野口　夏葵　…　8

文学部 人文社会学科 社会情報学専攻 1 年　石塚　美有　…　10

・リエゾン文庫書目一覧　…　12

何のために本を読みますか

文学部長　宇佐美 毅

【役に立つ本／役に立たない本】

私が子どもの頃、多くの子どもたちはマンガが大好きでした。しかし、子どもがマンガを読むことを多くの大人たちは歓迎しませんでした。「マンガは教育上よろしくない」「本を読むなら教養がつく本を読みなさい」などという大人がたくさんいました。今でもそういう傾向が多少はあるかもしれません。

しかし、今やマンガは日本文化の代表です。日本のマンガをきっかけにして日本に興味を持ち、日本語を学びたい、日本に留学したい、と思ってくれる外国人がおおぜいいます。文化の観点からも、国際交流の観点からも、そしてビジネスの観点からも、今やマンガというジャンルを無視することはできなくなっています。そう考えると、「ためになる読書」「ためにならない読書」などというものは、時代によっても変わるものであり、簡単に断定できるものではないはずです。もちろん、私は「小説や実用書よりもマンガを読みなさい」などといいたいわけではありません。ただ、この本は役に立たない、ためにならない、などという断定は簡単にはできないものであり、まずは自分の心が求めるものを読んでみることが大切だといいたいのです。

【小説の主脳は人情なり】

明治の文学者、劇作家、教育者でもある坪内逍遙という人は、日本の近代文学の基盤を築いた人ともいえます。この坪内逍遙の思想の根幹をよくあらわしている「小説の主脳は人情なり」（『小説神髄』）という言葉があります。これは、政治的な主張や教育的価値を求める手段として文学があるのではなく、人間の感情や本性を描くこと自体に文学の価値があるという主張をあらわした言葉です。私たちが文学を功利的な観点で見なくても済んでいるのは、遠くさかのぼれば、この坪内逍遙の切り開いた近代文学の思想の上に私たちが生きているからだともいえます。

【ただ心が読みたいと思うこと】

こうしたことは、文学や小説に限ったことではありません。私たちは、それが「役に立つか」「ためになるか」などと考える以前に「どうしてもその本を読みたい」とか「そこに書いてある内容を知りたい」という欲求にかられることがあります。この欲求は「知的好奇心」という名の感情であり、この感情がなければ人間の文化も科学も生まれなかったといってよいでしょう。そして、重要なことは、その「読みたい」「知りたい」という気持ちは、他人に代わりをしてもらうことができないということです。

たとえば、私が自分の家を建てたいと思っても、自分で家の設計や建築をできるわけではありません。ですから、建築士さんや大工さんたちに依頼をします。私が相続の書類を作成しようとしても、私には法律の専門知識がありません。ですから、弁護士さんや司法書士さんに依頼をします。しかし、私が読みたいと思う本を「私の代わりに読んでおいて」と依頼することはできません。私の知的好奇心を満たすのは私自身の行動しかないからです。

ただし、私たちの心が求めているのはどのような本なのか、それを具体的に見つけるのは容易ではありません。だからこそ、それを手助けする人が必要です。今回、スチューデント・ライブラリアンの学生たちがしたことは、高校生たちの心が求めている本を、求めている人に届けるためのお手伝いです。その仕事がいかに貴重なことか、一人ひとりが身をもって感じたことでしょう。その経験をぜひとも今後の学業に、人生に、おおいに活かしていってほしいと願っています。

図書室の主

文学部長補佐　山科　満

スチューデント・ライブラリアンの活動がとうとう終わりました。例年は山場となる緑苑祭（文化祭）での活動を終えた後も、学生・生徒さんたちの取り組みが続き、12 月の活動報告会後もなお図書館実習などを重ね、年が明けた 1 月 26 日に最後の読書会の活動報告を受け取ることとなりました。毎回ていねいに指導してくださいました大山先生をはじめとする杉並高校の先生方、大学生に負けない知的好奇心と読書量で活動を盛り上げてくれた高校生のみなさん、本当にありがとうございました。3 名のスチューデント・ライブラリアンの方々、お疲れ様でした。みなさんの活動に深い敬意を抱いたことを、この場を借りてお伝えします。このような「本好き」の学生が文学部にいることを、私は勝手に誇らしく思っています。

今年は初めて緑苑祭の折に杉並高校の図書室にお邪魔しました。朝早い時間に校内を見学したため、まだ図書室には誰もいませんでした。静かな図書室にたたずみ、とても懐かしい気持ちになりました。

今どきの図書室は、モダンな空間デザインを施され、開放的な雰囲気で、私たちの時代（40 年前！）のような、校舎の片隅にある暗い一角というイメージとは随分違っています。それでも、そこが特別な空間であることは、昔も今も変わりません。村上春樹氏の小説を持ち出すまでもなく、図書室は記憶の片隅にある大切な何かとの出会いの場であり、時には精神の異界への入り口でもあるのです。

高校時代、傍目にはおそらくラグビー小僧にしか見えなかった私ですが、実は秘かに図書室を憩いの場にしていました。どこにいてもしっくりこない、自分の居場所がどこにもない感じを常に抱えている若者だった私も、図書室では比較的自分らしくいられたように思います。それは私が本の虫だったということではなく、誰にも言わない迷いや悩みを受け止めてくれそうな本がそこにはある、という気がしていたからです。

その図書室には、いつ行っても必ず目にする女子生徒がいました。彼女と言葉を交わすことはほとんどありませんでしたが、1 日に 1 冊しか借りられないルールを残念がる言葉を投げかけられたことがありました。自分にとってはありえない読書量でありスピードです。以来、いつも窓際の指定席で静かに本を読んでいる彼女のことを、私は図書室の主（ぬし）と読んでいました。図書室のあるじは司書教諭か校長先生でしょうが、主はあるじより偉いのです。恐れ多い感じがして、主に私から声をかけることはありませんでしたが、その存在感に、私はあこがれていました。単純に言ってしまうなら、本好きの女の子はかっこいいのです。

今の時代も、図書室には主がいるのでしょうか。40 年前の主は、今はどうしているのでしょう。主と、読んだ本についてたくさん会話をしたかったと今になって思います。

発信型図書館の可能性
―2018 年度のスチューデント・ライブラリアン活動について―

中央大学杉並高等学校教諭　大山　裕隆(高大連携担当)

はじめに

本年度のスチューデント･ライブラリアン活動には大学生 3 人､中大杉並高校生 2 人が参加しました。年々内容が高度になっていくなか、5 人のライブラリアンたちは先輩たちに負けずに素晴らしい成果を見せてくれました。私はこの活動に関わるようになってから 5 年になりますが、時代の変化に順応した若い人たちの発想の柔軟さや多様さには、毎年驚かされます。物心がついたころから携帯電話やスマートフォンに慣れ親しんだ彼らならではの発想により、私のほうが新たなことに気づかされたり、驚かされたりする、刺激的な体験ができました。

なかなかお互いの予定があわないなか、大学生の皆さんは計 10 回以上杉並高校に足を運んでくださいました。文化祭では、食べ物の出てくる小説や理想の図書館についての展示発表を行いました。そして、今年度初めての試みとしてビブリオバトルを行いました。また、リエゾン文庫に関しては、冊子を作成し、杉並高校生に広く知ってもらうことに貢献していただきました。読書会や図書館業務の実習活動など、様々なことに挑戦していだたいています。

今回の活動を通じて私が最も感じたのは、「発信型の図書館」の可能性です。単に本が置いてあり、検索機能があるだけの場所ではなく、書物の豊かな世界を地域の人々や学生に紹介していく機能を持った施設としての図書館の可能性をライブラリアンたちは見せてくれました。

文化祭での活動

文化祭においては、二つの展示発表とビブリオバトルを行いました。

魅力的な本を紹介し、来訪者に発信していくというのは、学校図書館だけではなく、これからの時代の地域図書館にも求められる役割なのではないかと思います。今年度は食べ物の出てくる小説について展示を行うという、ユニークなアイディアにより、様々な本が紹介されました。具体的な内容は、ライブラリアンたちの報告に譲ることにして、ここでは私自身がライブラリアンたちに感化されたことについて少し書かせていただければと思います。ライブラリアンたちが紹介してくれた本の中に『図書館の魔女』という小説があります。こちらはベストセラーになったファンタジー小説であり、私はこの本について、ライブラリアンたちが紹介してくれるまで知りませんでした。彼らの話を聞いているうちに、ぜひ読んでみたいと思うようになり、購入したところ、寝食を忘れて読みたくなるほど面白い小説でした。まさにライブラリアンたちは私に向けて、魅力的な本を「発信」してくれたのです。この小説の登場人物たちが楽しむ「食べ物」も巧みに描写されており、実際にそれが存在したらぜひ食べてみたいと思うものばかりでした。

「理想の図書館」に関しては、杉並高校生を対象にアンケートを取るなどして、広く意見を集めることで充実した内容となりました。現在、地方自治体や企業が経営している図書館は大変多様化しており、建築物としても魅力的なものが増えているということを、ライブラリアンたちの発表から知ることができました。近年、電子書籍の普及により、紙の本を売る書店も、カフェなどを併設するなど様々な工夫をしていることがよく知られていますが、図書館もまた IT 時代に合わせて様々な試みが必要なのだということがよくわかる発表でした。

ビブリオバトルは、私自身は参加できず大変残念だったのですが、活発な対戦が行われたと聞いてお

ります。ライブラリアンたちの感想を聞くと、ビブリオバトルをすることで、単に読書を終えた時よりもよりその作品に対する理解が深まったと言っていました。

読書会・リエゾン文庫の活性化

読書会では、辻村深月の『かがみの孤城』を扱いましたが、こちらでも他人の意見を聞くことで、作品が様々なレベルで解釈可能なことを学ぶことができたようです。この『かがみの孤城』も、ライブラリアンたちが私に教えてくれた素敵な本の一つです。個性豊かな登場人物たちや、小説の中で使われている設定がそれぞれどんな意味を持つのかということに対して、私も気づかないような本の魅力が語られ、大変楽しい会となりました。

リエゾン文庫に関しては、今年度のライブラリアンたちは素敵な小冊子を作ってくれました。本の内容と魅力を伝えてくれる冊子になっています。これらの情報をもとに、高校生が文学部に親しみを持ってくれるのではないかと思います。このスチューデント・ライブラリアン活動が始まった当初は、このリエゾン文庫の活性化が大きな目標の一つでした。こうした形で実を結ぶことができ、大変うれしく思っています。

最後に

この活動を担当するようになって、図書館の持つ可能性について、私自身がたびたび考えるようになりました。電子書籍が多くの人に使われるようになり、ウェブ上で膨大な情報を得られる今、図書館がこの先どのように変化していくのかという問題は、大変興味深いと思います。

昨年度の活動も大変活発なものでしたが、今年は先輩たちの活動をさらに発展した形になり、担当者としてうれしい限りです。来年度以降も、より発展した形でこの活動が続いていくことを願っています。

スチューデント・ライブラリアン５期生 活動記録

2018年度

応募期間　4月2日（月）～5月11日（金）
選考方法　書類審査・面談
面談日程　5月17日（木）、5月22日（火）
応募者数4名　採用者数3名

第 1回派遣　6月　2日（土）
第 2回派遣　7月 15日（日）
第 3回派遣　8月　8日（水）
第 4回派遣　8月 13日（月）
第 5回派遣　8月 25日（土）
第 6回派遣　8月 28日（火）
第 7回派遣　9月　9日（日）
第 8回派遣　9月 13日（木）
第 9回派遣　9月 14日（金）
第10回派遣　9月 15日（土）　緑苑祭（文化祭）
第11回派遣　9月 16日（日）　緑苑祭（文化祭）
第12回派遣 11月 17日（土）
第13回派遣　1月 26日（土）

活動報告会　12 月 13 日（水）

文学部 人文社会学科　社会情報学専攻 2 年

北　夏苗

大学 2 年生になって何か新しいことを始めたいと考えていたところ、スチューデント・ライブラリアン募集の件を聞きました。昨年スチューデント・ライブラリアンだった友人からどのような活動をしたのかを聞いて、楽しそうな活動だと感じました。また司書課程を履修していることから、図書室での活動に興味を持ったため参加を決めました。

私達の活動は大きく分けて 3 つありました。

①文化祭での企画や展示

②読書会

③リエゾン文庫を紹介する冊子の作成

文化祭では 3 つの企画・展示を行いました。まず 1 つ目はビブリオバトルです。ビブリオバトルとは参加者が持ち寄った本を時間内で紹介し、投票で一番読みたいと思った本を決める書評会です。今回は 3 分で本を紹介しました。ビブリオバトルは文化祭で 1 日 1 回開催し、また、1 日目と 2 日目で別の本を用意しました。制限時間の中で、おすすめの本をどう工夫して伝えたら良いか難しかったです。しかし、自分が読んだことがある本を新たな視点で読むことができました。またメンバー内で発表後もこの企画の本の話題になっていたためメンバー自身楽しめた企画だったのではないかと思います。2 つ目は「食」に関する本の展示です。1 人 2 冊程度「食」に関する本を読み模造紙にまとめました。私が読んだ本は成田名璃子さんの「東京すみっこごはん」と重松清さんの「峠うどん物語」です。この 2 冊は今回初めて読んだ本でした。今回の展示が無かったら読むことがなかった本かもしれません。そのためこの展示を行うことができて良かったと思いました。3 つ目に「理想の図書館」の展示です。この展示は従来の図書館の枠組みに囚われず、理想の図書館を想像しようというものです。この展示を行うにあたって大山先生ご協力のもと高校生にアンケートを実施しました。この結果をもとに 3 つのタイプの図書館を考えて掲示しました。アンケートの結果で注目すべき点は自習できる環境を求める高校生が多かったことです。このことから、図書館側が利用者の声を集める必要性を改めて感じました。

文化祭の後は読書会を行いました。読書会とは同じ 1 冊の本を読んで意見を交換しあう会のことをいいます。今回読書会で選んだ本は辻村深月さんの「かがみの孤城」です。読書会を行うにあたって大山先生の方からいくつか問題を提示して頂きました。本をあまり深く読んだことはなかったので、とても良い経験になりました。また 1 つの本について誰かと時間をかけて考えたことはなかったので新鮮でした。

読書会と同時並行でリエゾン文庫を紹介する冊子の作成を行いました。まずリエゾン文庫を高校生に手に取ってもらうためにどうすれば良いか大学生で考えました。リエゾン文庫に限らず、高校生にとって初めて学術書を読むことは多少ハードルがあると思います。そこでリエゾン文庫を手に取ってもらうためのきっかけとして冊子を作ることにしました。この冊子をきっかけに高校生がリエゾン文庫を手に取って、文学部の学びを想像してもらえると嬉しいです。

スチューデント・ライブラリアンは高校生と大学生の活動のため、メンバー内で少し年齢が離れています。しかし、本を通じることで年齢など関係なく活発なコミュニケーションをとることができました。今年の活動の反省点はビブリオバトルであまり人を集めることができなかったことです。この点に関しては、宣伝方法までメンバーで考えるべきだったと思います。 活動を行う上で多くの方に協力して頂きました。大変感謝しています。1 年間、本に関わる活動ができて良かったです。ありがとうございました。

文学部　人文社会学科　社会情報学専攻２年

野口　夏葵

私は昔から図書館司書の仕事に興味があり、現在は中央大学の図書館情報学コースで司書資格取得のために日々学んでいます。スチューデント・ライブラリアン活動の存在を初めて知ったのは入学後のことでしたが、当時は参加する踏ん切りがつかず、応募することなく募集期間が終わってしまいました。それが心残りで、その年の活動報告会での発表や活動に参加していた友人から話を聞き、やはり来年度は私も活動に応募しようと心に決めました。このような経緯で参加させていただくことになったスチューデント・ライブラリアン活動ですが、本年度は中央大学杉並高校の文化祭である緑苑祭での企画に加え、読書会や図書館業務体験を行いました。以下、本年度の活動に関して詳しく述べさせていただきたいと思います。

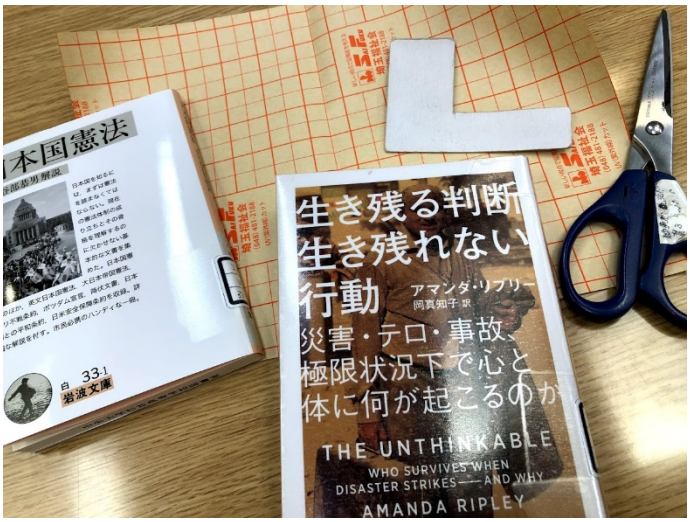
中央大学杉並高校の緑苑祭では、①理想の図書館に関する発表、②食に関するおすすめの本の紹介、③ビブリオバトルの三つを企画させていただきました。

理想の図書館は、中杉の生徒に自分が理想とする図書館についてアンケートを行い、その結果から高校生にはどんな図書館が求められているのかということをポスターにまとめました。生徒からは飲食や会話が可能なカフェのような図書館が求められているほか、Wi-Fi 環境が整えられていることやインターネットに接続されたコンピュータが揃えられていること、広い自習スペースがあることなど、現実味のある意見も多く寄せられました。実際に学生の意見を聞けたことにより、学生から図書館に対する需要は高いことがわかり、図書館の今後の発展について考える機会となりました。

食に関するおすすめの本の紹介では、私たちは、私たちが生きるために必要不可欠である、「食べる」という行為について着目し、スチューデント・ライブラリアンの五名が「食」という観点から選んだおすすめの本を紹介するポスターを制作しました。一口に食に関する本といっても、私たちが選んだ本は多岐にわたっていて、そこで私たちは、選んだ本を「食に関しての描写の量」と「本そのものの読みやすさ」の二点を考えて、表にまとめ、普段あまり読書をしない人から、読書が好きで少し歯ごたえのある本が読みたいという人までどんな人にもおすすめできるものにしました。完成した展示物は、学生たちそれぞれの目線で本が紹介されていて、見ていてその本を手に取って読んでみたくなるものになりました。

また、本年度のスチューデント・ライブラリアンは初めてビブリオバトルを実施しました。スチューデント・ライブラリアンの五名がそれぞれ本を紹介し、質疑応答の後投票でチャンプ本を決めるという流れで行いました。高校生、大学生の垣根なくそれぞれが本のジャンルもさまざまに全力の発表を行ったことで、チャンプ本を決めることが真の目的ではなく「本を通じて人を知る」を一番の目的としているビブリオバトルらしい時間になったと思います。中杉の先生方も多くいらっしゃり、発表者に的確な質問をくださりました。私自身、ビブリオバトルに参加するのは初めてでしたが、以前から味のあったビブリオバトルにこうして参加できたことはとてもよい経験になりました。

読書会では、2018 年の本屋大賞受賞作としても有名な辻村深月さんの「かがみの孤城」を取り上げて行いました。大山先生からいくつかの問いをご提示いただき、それについてスチューデント・ライブラリアンが意見を交わしあい内容を深めていくという形で行われました。一冊の本を何度も見返しながら台詞や表現の意図、登場人物の変化などについて深く考えていくことは普段一人で読書を楽しむ時とは全く違っており、本に対して正面から向き合うことのできた有意義な時間となりました。



上記の活動に加えて、中杉図書館の司書の方のご厚意で図書館業務の体験もさせていただきました。初めに中杉図書館や日常の業務内容に関しての説明を受けた後、実際に本のカバー掛けの作業を体験させていただきました。慣れない作業は神経を使うため難しく感じる部分もありましたが、丁寧に指導していただき、普段はできない貴重な体験ができて嬉しく思っています。

一年間スチューデント・ライブラリアンとして活動をしてきて、日頃自分一人で本を読んでいるのとは違い、本を通じた人との関わりを実感することができました。人に対して本をおすすめしたり、他の人の意見を聞きながら本を読み深めていったり、誰かに対して本を提供するための仕事を行うことは今までにない経験であり、自分に新しい視点や気づきを与えてくれました。中央大学杉並高校の先生や生徒の方には多くのことを学ばせていただき、大変お世話になりました。この一年間で得たことを糧として、今後も図書館に関する勉学に励んでいきたいと思います。

文学部 人文社会学科 社会情報学専攻 1年

石塚　美有

私は中学時代から図書館司書になりたいと考えていて、そのために必要なことを学ぶために中央大学の社会情報学専攻図書館情報学コースに所属しています。授業でスチューデント・ライブラリアンの募集を受けて、この活動なら図書館司書とはどのようなものなのかを実際に体験する中で学ぶことができ、現在学んでいることを実践することができるチャンスだと思い参加しました。

一年を通して様々な活動をしてきたのでその一部を紹介したいと思います。

まず、緑苑祭で企画展示とビブリオバトルを行いました。企画展示は「食」のおすすめ本と理想の図書館について模造紙にまとめて展示しました。

「食」のおすすめ本の紹介は、私にとってとても斬新なものでレシピ本や料理が主体となった本だけを取り上げるのではなく描写の中でちょっとでも料理がでてくればよいというもので、様々な作者の「料理」の捉え方をあえて切り取ることで新しい本とのかかわり方を多くの人に提示できた展示だと感じています。

理想の図書館の展示は、主に私の意見を反映してもらって実現した企画展示です。現在の図書館は、たくさんの人のニーズにこたえる中で非常に多種多様化し多機能化してきています。要望を叶えるのはさほど難しいことではないという今の世の中で、人々が本当に求める図書館とはどのようなものなのか知りたくて発案しました。

杉並高校の生徒の皆さんにアンケートをとったところ大きく分けてカフェ型図書館、自習型図書館、機能充実型図書館の３つに分類することができ、とても興味深かったです。

また、緑苑祭中に何度か行ったビブリオバトルでは、いろいろな人がおすすめする本、それぞれの本に対する思い入れ、心に響く紹介の仕方など学ぶことが多かったです。

そもそも、ビブリオバトルとは発表参加者が読んで面白いと思った本を持って集まり順番に決められた時間で本を紹介し全ての発表が終了した後に「どの本が一番読みたくなったか？」を基準とした投票を参加者全員で行い最多票を集めたものを『チャンプ本』とする、本を中心としたコミュニケーションゲームです。

今回は緑苑祭という文化祭で行うということで、多くの人に見てもらえるように一般の人にも公開して行ったため、緊張こそしましたが初めて会う人と好きなん本について紹介し話し合うという貴重な体験ができました。

緑苑祭が終わってからは、読書会とリエゾン文庫の冊子づくりをしました。

読書会は一つの本を決めて読んできて皆でその内容について話し合うというものです。私は普段読書をする時は基本自己解決して他の人と好きなシーンや人物、解釈の仕方について語り合うことはしないので、第 3 者の意見を聞いたうえでもう一度読んでみると全く別の世界が広がり本当に驚きました。

そして、リエゾン文庫は附属高校生が文学部各専攻における多彩な研究・教育内容に日常的に自由に接することを可能するために設置されたもので、学術書など高校生が読むには難しいものが多いためあまり手に取ってもらえないという現状を改善するために、スチューデント・ライブラリアンがリエゾン文庫のいくつかをピックアップして紹介する冊子作りを行いました。

どのくらいの大きさなら手に取ってもらいやすいか、どういう項目があれば読んだ人の次に活きるのかなど利用者のことを気にしながらの作業はこれまでやってきた活動の中で一番司書の仕事に近いものを感じ、とても楽しくやりきることができました。

スチューデント・ライブラリアン全ての活動を通して、新しいことや思いもよらないアイディアや意見に触れることができ多くのことを学び成長することができました。

参加できて本当に良かったと思っています、ありがとうございました。

リエゾン文庫書目一覧（2019 年 3 月 25 日現在）

題目	著者等	出版社	配架先*
国文学専攻			
宇佐美ゼミ 第十六号 報告集 文学部国文学専攻 2013	宇佐美毅	宇佐美ゼミナール報告集	杉並
学研まんが 日本の古典 まんがで読む万葉集・古今和歌集・新古今和歌集	吉野朋美 監修	学研	杉並
後鳥羽院 コレクション日本歌人選 028	吉野朋美	笠間書院	杉並
西行全歌集	久保田淳・吉野朋美 校注	岩波文庫フェア	杉並
武士の家計簿 ―「加賀藩御算用者」の幕末維新	磯田道史	新潮新書	杉並
大学授業がやってきた！ 知の冒険	桐光学園特別授業	水曜社	杉並、横浜
テレビドラマを学問する	宇佐美毅	中央大学出版部	杉並、横浜
中島敦『李陵・司馬遷』定本篇	中島敦	中島敦の会	杉並、横浜
中島敦『李陵・司馬遷』図版篇	中島敦	中島敦の会	杉並、横浜
中島敦とその時代	山下真史	双文社出版	杉並
2014 年度 第 17 号 宇佐美ゼミ報告集	宇佐美毅		杉並
白門國文 第 26 号	中央大學國文學會		横浜
白門國文 第 27 号	中央大學國文學會		横浜
白門國文 第 28 号	中央大學國文學會		横浜
白門國文 第 29 号	中央大學國文學會		横浜
白門國文 第 30 号	中央大學國文學會		横浜
白門國文 第 31 号	中央大學國文學會		横浜
村上春樹と一九八〇年代	宇佐美毅、千田洋幸 編	おうふう	杉並、横浜
村上春樹と一九九〇年代	宇佐美毅、千田洋幸 編	おうふう	杉並、横浜
慶安の触書は出されたか（日本史リブレット）	山本英二	山川書店	杉並
中央大学國文 第 56 号	中央大學國文學會		横浜
中央大学白門國文 第 57 号	中央大學國文學會		横浜
書籍文化史一	山本英二・丹羽謙治・磯部敦・鈴木俊幸	鈴木俊幸	杉並、横浜
書籍文化史二	綿抜豊昭・中島穂高・鈴木圭一・浅岡邦雄・磯部敦・本多朱里・古相正美・鈴木俊幸	鈴木俊幸	杉並、横浜
書籍文化史三	柳沢昌紀・竹松幸香・合山林太郎・大竹寿子・浅岡邦雄・鈴木俊幸	鈴木俊幸	杉並、横浜
書籍文化史四	ﾋﾟｰﾀｰ・ｺｰﾆｯｷｰ・綿抜豊昭・勝又基・小林ふみ子・中澤伸弘・木越俊介・鈴木圭一・山本英二・磯部敦・鈴木俊幸・瀧田裕子	鈴木俊幸	杉並、横浜
書籍文化史五	柏崎順子・金井圭太郎・浅岡邦雄・鈴木俊幸	鈴木俊幸	杉並、横浜
書籍文化史六	堀川貴司・鈴木圭一・杉仁・蔵元朋依・磯部敦・鈴木俊幸	鈴木俊幸	杉並、横浜

題目	著者等	出版社	配架先*
書籍文化史七	高橋章則･中澤伸弘･鈴木俊幸	鈴木俊幸	杉並、横浜
書籍文化史八	岩坪充雄･杉仁･磯部敦･鈴木俊幸･高橋章則･高橋明彦･古相正美･五嶋靖弘･瀧田裕子･田村悦子･鄭恵珍･小村伊織･中道雅俊･矢澤由紀･宮田奈津紀･梁爽	鈴木俊幸	杉並、横浜
書籍文化史九	岩坪充雄･中澤伸弘･膽吹覚･牧野正久･高橋明彦･西谷泉･玉置豊美	鈴木俊幸	杉並、横浜
書籍文化史十	中澤伸弘･鈴木圭一･青柳涼子･素野辰也･檜垣優･鈴木俊幸	鈴木俊幸	杉並、横浜
書籍文化史十一	中澤伸弘･高木浩明･青柳涼子･鈴木翔･素野辰也･檜垣優･磯部敦･岩坪充雄･鈴木俊幸	鈴木俊幸	杉並、横浜
書籍文化史十二	岩坪充雄･堀川貴司･中澤伸弘･高橋明彦･稲岡勝･青柳涼子･梅澤亜矢･鈴木翔･素野辰也･鈴木俊幸･高木浩明･太田正弘	鈴木俊幸	杉並、横浜
書籍文化史十三	岩坪充雄･神林尚子･中澤伸弘･高木浩明･磯部敦･早川由美･2011 年度中央大学 FLP 鈴木ゼミ･鈴木俊幸	鈴木俊幸	杉並、横浜
書籍文化史十四	岩坪充雄･中澤伸弘･高木浩明･磯部敦･FLP 鈴木ゼミ･鈴木俊幸	鈴木俊幸	杉並、横浜
書籍文化史十五	岩坪充雄･稲岡勝･高木浩明･2013 年度中央大学 FLP 鈴木ゼミ･鈴木俊幸	鈴木俊幸	杉並、横浜
書籍文化史十六	堀部正円･岩坪充雄･太田正弘･中澤伸弘･鈴木俊幸･中央大学 FLP 鈴木ゼミ･高木浩明	鈴木俊幸	杉並、横浜
書籍文化史十七	太田正弘･高木浩明･鈴木圭一･中澤伸弘･稲岡勝･岩坪充雄･鈴木俊幸	鈴木俊幸	杉並、横浜
書籍文化史十八	太田正弘･岩坪充雄･高木浩明･堀部正円･中澤伸弘･中川和明･稲岡勝･鈴木俊幸･中央大学 FLP 鈴木ゼミ	鈴木俊幸	杉並、横浜
書籍文化史十九	高木浩明･中澤伸弘･膽吹覚･岩坪充雄･稲岡勝･鈴木俊幸	鈴木俊幸	杉並、横浜
報告集二十	宇佐美ゼミ	宇佐美ゼミナール報告集	杉並、横浜
英語文学文化専攻			
愛の技法　ｸｨｱ･ﾘｰﾃﾞｨﾝｸﾞとは何か	中央大学人文科学研究所編	中央大学出版部	杉並、横浜
アメリカ太平洋研究　Vol.16 March 2016	東京大学大学院総合文化研究科 アメリカ太平洋地域研究センター		杉並、横浜

題目	著者等	出版社	配架先*
アン・ブロンテ　二十一世紀の再評価	大田美和	中央大学出版部	杉並、横浜
英国小説研究　第 22 冊	「英国小説研究」同人	英潮社	杉並、横浜
英米文学研究　第 31 号	兼武道子他	中央大学文学部 英米文学会	杉並
大田美和の本	大田美和	北冬舎	杉並、横浜
きらい　大田美和歌集	大田美和	河出書房新社	杉並、横浜
葡萄の香り、噴水の匂い	大田美和	北冬舎	杉並、横浜
ブロンテ姉妹の世界	内田能嗣	ミネルヴァ書房	杉並、横浜
北冬　No.013	北冬舎	北冬舎	杉並、横浜
ミッキーはなぜ口笛を吹くのか	細馬宏通	新潮選書	杉並
夜のミッキー・マウス	谷川俊太郎	新潮文庫	杉並
レクイエム	田口智子・絵、大田美和・短歌	エディション q	杉並、横浜
記者たちは海に向かった 津波と放射能と福島民友新聞	門田隆将	角川文庫	杉並、横浜
人生の意味論	河西良治	開拓社	杉並、横浜
ドイツ語文学文化専攻			
クレーの絵本	谷川俊太郎	講談社	杉並
ジビレ・レヴィチャロフの小説『ブルーメンベルク』文化史と不死性（ドイツ文化　第六十七号抜刷）	縄田雄二	中央大学ドイツ学会	杉並
ドイツ語資料から見た留学期の斎藤茂吉 （ドイツ文化　第五十五号抜刷）	縄田雄二	中央大学ドイツ学会	杉並
ドイツの歴史教育	川喜田敦子	白水社	杉並
ドゥルス・グリューンバイン詩集　墓碑銘・日本紀行	縄田雄二　編訳	中央大学出版部	杉並
マルセル・バイアー講演　翳 （紀要抜刷　文学科第九十号）	縄田雄二	中央大学文学部	杉並
現代詩手帖	藤井一乃	思潮社	杉並、横浜
フランス語文学文化専攻			
九十三年（上下）	ヴィクトル・ユゴー	潮文学ライブラリー	杉並
ゴヤ　啓蒙の光の影で	T.トドロフ、小野潮　訳	法政大学出版局	杉並
ジャン＝ジャック・ルソー　自己充足の哲学	永見文雄	勁草書房	横浜
十九世紀フランス文学を学ぶ人のために	小倉孝誠	世界思想社	杉並
西洋美術への招待	田中英道　監修	東北大学出版会	杉並
対訳　フランス語で読む「赤と黒」	小野潮	白水社	杉並
中大仏文研究　第 45 号	中大仏文研究会		横浜
中大仏文研究　第 46 号	中大仏文研究会		横浜
フクシマ・ノート　忘れない、災禍の物語	ミカエル・フェリエ、義江真木子	新評論	杉並、横浜
フランス革命と文学	ベアトリス・ディディエ	白水社	杉並
フランス 19 世紀絵画	阿部成樹　他	ホワイトインターナショナル	杉並、横浜
屈服しない人々	ツヴェタン・トドロフ小野潮訳	新評論	杉並、横浜
ゴヤ　啓蒙の光の影で	ツヴェタン・トドロフ小野潮訳	法政大学出版局	杉並、横浜

題目	著者等	出版社	配架先*
ジェルメーヌ・ティヨン	ティヨン著小野潮訳	法政大学出版局	杉並、横浜
中国言語文化専攻			
現代中国のポピュラーカルチャー	飯塚容　他	勉誠出版	杉並
現代中国文化の光芒	中央大学人文科学研究所編	中央大学出版部	杉並、横浜
死者たちの七日間	余華、飯塚容　訳	河出書房新社	杉並
中国故事	飯塚朗	角川ソフィア文庫	杉並、横浜
中国人エリートは日本人をこう見る	中島恵	日経プレミアシリーズ	杉並
中国の「新劇」と日本　「文明戯」の研究	飯塚容	中央大学出版部	杉並
富萍　上海に生きる	王安憶、飯塚容・宮入いずみ　訳	勉誠出版	杉並
霊山	高行健、飯塚容　訳	集英社	杉並
中国動漫新人類　日本のアニメと漫画が中国を動かす	遠藤誉	日経 BP 社	杉並
会うための別れ　過士行　短編小説集	菱沼彬晁　訳	晩成書房	杉並、横浜
父を想う　ある中国作家の自省と回想	閻連科、飯塚容　訳	河出書房新社	杉並、横浜
いま、世界で読まれている 105 冊　2013	TEN-BOOKS　編	テン・ブックス	杉並、横浜
文化大革命を問い直す	朝浩之・金野純・陳継東・前田年昭　印紅標・鈴木一誌・森瑞枝・松本潤一郎・及川淳子		杉並、横浜
中国リベラルズムの政治空間	李偉東・鈴木賢・及川淳子・秦暉・徐友漁・梶谷懐・王侃・吉岡桂子・栄剣・牧陽一・賀衛方・阿古智子・水谷尚子・王建勛・張博樹		杉並、横浜
最後の審判を生き延びて	劉暁波		杉並、横浜
憎しみに未来はない　中日関係新思考	馬立誠		杉並、横浜
中国語で伝えたい自分のこと日本のこと	及川淳子		杉並、横浜
わたしの中国語 32 のﾌﾚｰｽﾞでこんなに伝わる	及川淳子		杉並、横浜
おもてなしの中国語 2018 年度 4-9	及川淳子		杉並、横浜
おもてなしの中国語 2018 年度 10-3	及川淳子		杉並、横浜
中国語をはじめよう	及川淳子		杉並、横浜
現代中国を知るための44章	藤野彰・曽根康雄		杉並、横浜
上海	榎本泰子		杉並、横浜
アジアと生きるアジアで生きる	鄭俊坤・金大偉・柳玟熙・飯塚容・大田美和・藤岡朝子・妹尾達彦・村上薫・佐藤洋治・長谷川彩未・ﾛﾏｰﾅ・ｺﾌﾗｰ・鎌田東二・趙維平・麻生晴一郎		杉並、横浜
作家たちの愚かしくも愛すべき中国	高行健・余華・閻連科		杉並、横浜
日本史学専攻			
外務官僚たちの太平洋戦争	佐藤元英	NHK ブックス	杉並、横浜
魏志倭人伝の考古学	佐原真	岩波書店	杉並

題目	著者等	出版社	配架先*
3・11複合災害と日本の課題	佐藤元英、滝田堅持	中央大学出版部	横浜
市民の考古学 4　考古学でつづる日本史	藤本強	同成社	杉並
昭和初期対中国政策の研究　田中内閣の対満蒙政策	佐藤元英	原書房	杉並
縄文社会研究の新視点　−炭素 14 年代測定の利用−	小林謙一	六一書房	横浜
中央史学　創刊号	中央史学会		横浜
中央史学　第 2 号	中央史学会		横浜
中央史学　第 3 号	中央史学会		横浜
中央史学　第 4 号	中央史学会		横浜
中央史学　第 5 号	中央史学会		横浜
中央史学　第 6 号	中央史学会		横浜
中央史学　第 7 号	中央史学会		横浜
中央史学　第 8 号	中央史学会		横浜
中央史学　第 9 号	中央史学会		横浜
中央史学　第 10 号	中央史学会		横浜
中央史学　第 11 号	中央史学会		横浜
中央史学　第 12 号	中央史学会		横浜
中央史学　第 14 号	中央史学会		横浜
中央史学　第 15 号	中央史学会		横浜
中央史学　第 17 号	中央史学会		横浜
中央史学　第 19 号	中央史学会		横浜
中央史学　第 20 号	中央史学会		横浜
中央史学　第 21 号	中央史学会		横浜
中央史学　第 22 号	中央史学会		横浜
中央史学　第 23 号	中央史学会		横浜
中央史学　第 24 号	中央史学会		横浜
中央史学　第 25 号	中央史学会		横浜
中央史学　第 27 号	中央史学会		横浜
中央史学　第 29 号	中央史学会		横浜
中央史学　第 31 号	中央史学会		横浜
中央史学　第 32 号	中央史学会		横浜
中央史学　第 34 号	中央史学会		横浜
中央史学　第 35 号	中央史学会		横浜
中央史学　第 36 号	中央史学会		横浜
中央史学　第 37 号	中央史学会		横浜
日本の中世 12　村の戦争と平和	坂田聡、榎原雅治、稲葉継陽	中央公論新社	杉並
発掘で探る縄文の暮らし　中央大学の考古学	小林謙一	中央大学出版部	杉並、横浜
苗字と名前の歴史	坂田聡	吉川弘文館	杉並

題目	著者等	出版社	配架先*
民衆と天皇	坂田聡、吉岡拓	高志書院	杉並
東洋史学専攻			
アジア史における制度と社会	中央大学東洋史学研究室　編	白東史学会	杉並
池田雄一教授古稀記念アジア史論叢	中央大学東洋史学研究室　編	白東史学会	杉並
イスラム世界論 トリックスターとしての神	加藤博	東京大学出版会	杉並
環境から解く古代中国	原宗子	大修館書店	杉並
菊池英夫教授山崎利男教授古稀記念アジア史論叢	中央大学東洋史学研究室　編	刀水書房	杉並
サラディン　イェルサレム奪回	松田俊道	山川出版社	杉並、横浜
中央大学　アジア史研究　第 37 号	白東史学会 中央大学文学部東洋史研究室		横浜
中央大学　アジア史研究　第 38 号	白東史学会 中央大学文学部東洋史研究室		横浜
中央大学東洋史学専攻創設五十周年記念 アジア史論叢	白東史学会	白東史学会	杉並
明代中国の疑獄事件	川越泰博	風響社	杉並
遊牧民から見た世界史　増補版	杉山正明	日本経済新聞出版社	杉並
四字熟語歴史漫筆	川越泰博	大修館書店	杉並
川越泰博教授　古稀記念アジア史論叢	中央大学東洋史学研究室　編	白東史学会	杉並、横浜
アンコール遺跡と社会文化発展 アンコール・ワットの解明4	石澤良昭　監修・坪井善明　編	連合出版	杉並、横浜
カンボジアの民話世界	高橋宏明　訳／編	めこん	杉並、横浜
グローバル・ヒストリー	妹尾達彦	中央大学出版部	杉並、横浜
西洋史学専攻			
英雄詩とは何か	中央大学人文科学研究所　編	中央大学出版部	杉並
近世ヨーロッパ軍事史	A・バルベーロ	論創社	杉並
広義の軍事史と近世ドイツ ―集権的アリストクラシー・近代転換期	鈴木直志	彩流社	杉並
哲学専攻			
愛の哲学、孤独の哲学	アンドレ・コント＝スポンヴィル、 中村昇、他　訳	紀伊國屋書店	杉並
ウィトゲンシュタイン　ネクタイをしない哲学者	中村昇	白水社	杉並
ウィトゲンシュタイン「哲学探究」入門	中村昇	教育評論社	杉並、横浜
小林秀雄とウィトゲンシュタイン	中村昇	春風社	杉並、横浜
ささやかながら、徳について	アンドレ・コント＝スポンヴィル、 中村昇、他　訳	紀伊國屋書店	杉並
シーシュポスの神話	カミュ	新潮文庫	杉並
色彩について	ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン、 中村昇、他　訳	新書館	杉並
ベルクソン=時間と空間の哲学	中村昇	講談社	杉並、横浜
ホワイトヘッドの哲学	中村昇	講談社	杉並、横浜
母の発達	笙野頼子	河出文庫	杉並
どこでもないところからの眺め	トマス・ネーゲル、中村昇、他　訳	春秋社	横浜

題目	著者等	出版社	配架先*
社会学専攻			
【改訂版】戦後日本青少年問題考	矢島正見	一般財団法人 青少年問題研究会	杉並、横浜
家族革命	清水浩昭、森謙二、岩上真珠、山田昌弘	弘文堂	杉並、横浜
「家族」難民 生涯未婚率 25%社会の衝撃	山田昌弘	朝日新聞出版	杉並、横浜
家族の衰退が招く未来 「将来の安心」と「経済成長」は取り戻せるか	山田昌弘、塚崎公義	東洋経済新報社	杉並、横浜
家族のリストラクチュアリング 21 世紀の夫婦・親子はどう生き残るか	山田昌弘	新曜社	杉並、横浜
高校生のための人気学問ガイド	矢島正見	旺文社	杉並
「婚活」時代	山田昌弘、白河桃子	ディスカバー携書	杉並、横浜
少子社会日本 もうひとつの格差のゆくえ	山田昌弘	岩波書店	杉並、横浜
女性活躍後進国ニッポン	山田昌弘	岩波書店	杉並、横浜
震災婚 震災で生き方を変えた女たち ライフスタイル・消費・働き方	白河桃子	ディスカバー携書	杉並、横浜
新平等社会 「希望格差」を超えて	山田昌弘	文芸春秋	杉並、横浜
旅をして、出会い、ともに考える― ―大学ではじめてフィールドワークをするひとのために	新原道信	中央大学出版部	杉並
中央社会学 第 22 号 2013	中央大学文学部社会学会		横浜
中央社会学 第 23 号 2014	中央大学文学部社会学会		横浜
なぜ若者は保守化するのか 反転する現実と願望	山田昌弘	東洋経済新報社	杉並、横浜
パラサイト社会のゆくえ データで読み解く日本の家族	山田昌弘	ちくま新書	杉並、横浜
パラサイト・シングルの時代	山田昌弘	ちくま新書	杉並、横浜
ワーキングプア時代 底抜けセーフティーネットを再構築せよ	山田昌弘	文芸春秋	杉並、横浜
結婚クライシス （中流転落不安）	山田昌弘	東京書籍	杉並、横浜
モテる構造 男と女の社会学	山田昌弘	ちくま新書	杉並、横浜
社会情報学専攻			
インターネットが壊した「こころ」と「言葉」	森田幸孝	幻冬舎 ルネッサンス新書	杉並
うわさとは何か ネットで変容する「最も古いメディア」	松田美佐	中公新書	杉並、横浜
うわさの謎 流言、デマ、ゴシップ、都市伝説はなぜ広がるのか	松田美佐、川上善郎、佐藤達哉	日本実業出版社	杉並、横浜
SF映画で学ぶインタフェースデザイン アイデアと想像力を鍛え上げるための 141 のレッスン	NATHAN SHEDROFF, CHRISTOPHER NOESSEL	丸善出版	横浜
ケータイ学入門 メディア・コミュニケーションから読み解く現代社会	松田美佐、岡田朋之	有斐閣	杉並、横浜
ケータイ社会論	松田美佐、岡田朋之	有斐閣	杉並
ケータイのある風景 テクノロジーの日常化を考える	松田美佐、岡部大介、伊藤瑞子	北大路書房	杉並、横浜
C言語によるスーパーLinux プログラミング	飯尾淳	softbank creative	横浜
ラーニング・コモンズ	加藤信哉・小山憲司	勁草書房	杉並、横浜
小山ゼミ論文集第1号	小山ゼミ学生	小山憲司ｾﾞﾐﾅｰﾙ	杉並、横浜
小山ゼミ論文集第2号	小山ゼミ学生	小山憲司ｾﾞﾐﾅｰﾙ	

題目	著者等	出版社	配架先*
社会情報学ハンドブック	吉見俊哉、花田達朗	東京大学出版会	杉並
情報貧国ニッポン～課題と提言	山崎久道	紀伊国屋書店	横浜
図書館・アーカイブズとは何か	粕谷一希、菊池光興、長尾真 編	藤原書店	杉並
教育学専攻			
イチから始める 外国人の子供教育	臼井智美 編	教育開発研究所	杉並
教育学をつかむ	木村元、小玉重雄、船橋一男	有斐閣	杉並
まんが クラスメイトは外国人—多文化共生の物語	「外国につながる子供たちの物語」編集委員会編	明石書店	杉並
心理学専攻			
面白いほどよくわかる！臨床心理学	下山晴彦	西東社	杉並
小学生の生活とこころの発達	心理科学研究会	福村出版	横浜
心理学論文の書き方 おいしい論文のレシピ	都筑学	有斐閣アルマ	杉並、横浜
中高生のためのメンタル系サバイバルガイド	松本俊彦 編著	日本評論社	杉並
やさしい青年心理学	白井利明、都筑学、森陽子	有斐閣アルマ	杉並、横浜
やさしい発達心理学 乳児から青年までの発達プロセス	都筑学	ナカニシヤ出版	杉並、横浜
その他			
アジア史における法と国家	中央大学人文科学研究所 編	中央大学出版部	杉並
アルス・イノヴァティーヴァ	中央大学人文科学研究所 編	中央大学出版部	杉並
イデオロギーとアメリカン・テクスト	中央大学人文科学研究所 編	中央大学出版部	杉並
埋もれた風景たちの発見 ヴィクトリア朝の文芸と文化	中央大学人文科学研究所 編	中央大学出版部	杉並
芸術のイノヴェーション	中央大学人文科学研究所 編	中央大学出版部	杉並
ツァロートの道 ユダヤ歴史・文化研究	中央大学人文科学研究所 編	中央大学出版部	杉並
民国前期中国と東アジアの変動	中央大学人文科学研究所 編	中央大学出版部	杉並
文法記述の諸相	野田時寛・藤原浩史・林明子・西沼行博・谷部弘子・工藤早恵・遠藤雅裕・大羽良・若林茂則・市川泰男・新井洋一	中央大学出版部	杉並、横浜
文法記述の諸相Ⅱ	野田時寛・藤原浩史・大羽良・林明子・西沼行博・工藤早恵・遠藤雅裕・堀田隆一・千葉修司・新井洋一	中央大学出版部	杉並、横浜

配架先* 杉並＝中央大学杉並高等学校　横浜＝中央大学附属横浜高等学校

「食」に関する本の紹介

これまでの活動を踏まえて感じたこと

2018 年度

スチューデント・ライブラリアン活動報告書

平成 31 年 3 月 25 日　発行

©中央大学文学部